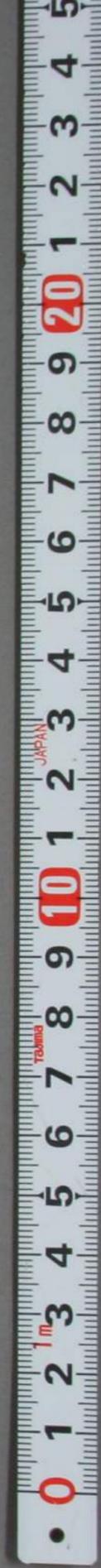




稻妻後編
四の巻



13
3047
4



山陰は栖をりし。浮雲の財を集め。不義の富を望として。懶貪邪見の老女あり。其出身と尋るに昔若くは時都五条坂に住百魔とく。かれは遊女にて曲弄絲竹のあつた更あり。よろづの藝よろづり。むまこの人よりでらむ。身あれども万能より一心をこめる。諺乃おとく。生得志ありゆゑに。漸々零落てある身は成るなり。年ハ五十歳。近く昔の花の散えて。今ハ色香も失されど。身体ハ健あて若入あも。まこりたり。そとめハ此山里に住ま。或山賤の熊路。通花の陰。休む重荷は肩とか。月諸共ハ山と出て少の賃銭とあり。或ハ織姫の五百機。窓に入て枝の鶯系る車。紡績の宿は身を置。人にやとられ手間仕度して。まづに命とつた錢と空蟬のやう衣。松ハ袖はわく霜ハ夜寒の月ハ打とさ。礎の音もせり。く。まづ

心かたやれども昔忘まぬ。才とて。老女の化粧冬の月げふおそり。姿多。年ハ似合ど岩疊あて。道を走り岩と跳ること。人ハまづまて。とやとれ。昔此山ハ山姥とて。飛行自在の鬼女あり。夫にも似たり。と。里人寺百魔山姥とて叫ぶる。あてあり。此山奥ハさうかんご。た。凡公の妾と避て住め。ひる。此は終焉をとりあひ。其跡空屋とあり。と。幸とし。其従者どもと追拂ひ其家と奪取て任ぬ。わ。深山ハの。こもがらん。鄙目あれぬ。結構の殿造なり。と。爰より。幾。過ぬる月と松皮屋根。今ハ茅又葺かて。漸々任荒れぬ。と。金壁の破ま。古及故めて補ひ。葺雨折戸の崩ま。と。荒。蛸額の翠簾の。薦席と垂綴帳の風泄。と。波張乃紙帳。と。高麗縁の疊の。と。所ハ。破几帳。

大月卒吉是巻之三

冬竹龍の寒さ凌ぐ林へ六筵屏風を立まへ。高時給の御厨子に播磨
播磨金欠陶の器を置る。香の薫のちみとして昔ゆけに経机
小獸の肉と屠などあげても無慙にもおがえさる。素貪欲深者なれば
金銀とむさがる一つの悪計とみひつれてありひとをゆあわけてゆゆと
貯の金ありる人雇と賃仕支して貪き中にも惜まなくつらげ
秘おれと本錢と折く山を下り。人商人又つたて幼き女の手をもと價
安く買取てあまう養おれ妹と醜と賢と思ふると紙をびびりけく。
それくはさぬぐの藝をたこ生立て或傾城白拍子傀儡遣葉女
妾湯女或わん小や浮身宿比丘尼辻君伽やらみだ醜養よりりて
上下とまらち本金に十倍して價を高く都鄙又賣法て非道の
金と貪これとうちた樂とてさるも人里遠き深山なれこれと知者

ありり。類い友と集るの理にて彼有漏路太郎无漏路五郎兄弟乃
強盗梅津嘉門の娘玉蟲を此老女に賣与へるが縁とあり兄弟乃
今此老女に隨身して此家又任るが老女は折く彼寺兄弟と諸園又
旅立せて多不幼女と買とせ又奪とせとて益欲をむさがる。
美目貌よく太夫白拍子なれりもあつた幼女は常は紅粉を
けりせ色よく衣と着せ飾立て大事は育てあつたき少くもつら
肌をわくをむらりの織布と著せて柴をわく水とすせ又ハ竈のりこ
追下一切割煮焼の業とせせまきびくあひけりひつたり意は月こ
われづらまら呵晋打擲あどくひこく邪見のあらまひをたす
露もろも情心をりてなれ幼者ごもの目け女の鬼ともええ山姥と
異名をとりしもふるとあひておそれあひぬ一日老女つらも乃ご

老女らうにょの如く。此度このたびへ浮草うきくさ出でよ。都みやこの目下めげに情なさけらうんことあまを。浪花なみぎはなの如ごとく。飄ひら々ひらと。浮草うきくさの太夫たふよ。ほりりト。籬まき節ふしうへと。浮草うきくさハ三弦さんげん把つかてひたあ。催馬樂まをらの古風こふううら。調子てうしはて

たえて。あはれと。あまを。かへ。

と。ふとき。や。く。と。ふ。や。な。い。それ。六節むつせつも三弦さんげんも。うら。と。物ものお。が。え。う。ま。の。や。の。三弦さんげんこ。う。こ。せ。と。く。魚うい乃のさ。ま。み。く。を。ま。さ。う。う。

う。そ。て。あ。は。れ。と。あ。ま。を。か。へ。い。り。せ。の。あ。ま。を。

宵よく。ぬ。き。我われさ。う。

う。う。と。三弦さんげんと。押おされ。ば。浮草うきくさの。う。こ。び。弾ひたこ。い。と。退あひき。み。此この。う。い。

礪波とがなみ出でよ。都みやこの。の。が。せ。て。白拍子しろはくしの。つ。り。き。の。教しゆの。昔むかし祇王ぎぎうが。清盛きよしげの。前まへで。う。ま。今いま様さま。祝あは儀ぎの。席せきは。い。の。文ぶん句く。志こころも。い。せ。ぬ。の。

う。ま。て。い。ん。ま。の。い。は。ど。礪波とがなみの。出で。扇あふぎを。取とて。拍子はくしと。打うち。

蓬萊山ほうらいさんの。千歳せんさい経きやう。萬歳まんさい千秋せんしゆ重ちゆうさ。う。松まつの。枝えだは。

鶴つる泉いづみ食を巖いわの上のに。龜かめあ。ま。を。

と。折お返かへし。と。ぞ。う。い。る。そ。それ。で。よ。此こ次ぎの。露つゆ野のが。番ばんと。う。と。く。出でよ。と。

の。い。れ。は。年としハ。十とと。う。り。は。て。額ひら髪かみを。前まへに。垂たれ。油あぶらつ。さ。う。布ぬい子こ着きて。身み上うへに。

濕ぬ瘡かさと。か。さ。乱みださ。さ。う。が。初はつの。痒かゆを。癢かゆて。出でよ。老らう女にょの。これ。と。外まへ皆みなで。邪よこしま眼まなこ。

そ。ら。の。の。物ものお。び。え。の。ま。の。奴やつと。や。忘わすれ。せ。ぬ。身みに。濡ぬぬ。と。股もも。

あ。つ。は。う。の。い。と。う。ど。文ぶん弥や節せつの。袖そで時とき兩りやう彈だんて。い。ま。と。の。う。と。う。さ。ふ。才さいう。ら。

戦いくさ栗くり。三さん紋もん把つかて。哀あはれ。け。に。

めさるべいのよか。明日、又道中どんべいに。うらむいと枕まぶらさげめ。
これか旅の殿さ。情かい。あんど。蚤が。おあきて。はくんで。わらむらべの。小痒い。
ひら。痒いよ。

とこふよに。つめて。ぢよか。めたるまを。まご。歌が。ごぎら。とて。ごご。うら。色しく。
君が。こぬ。夜い。暇も。あへぬ。涙の。淵へ。枕と。けら。なる。

と。か。ま。う。ゆ。が。と。う。う。ひ。れ。む。さ。う。り。の。老。女。も。恐。ろ。後。て。お。し。れ。奴。と。笑。る。ら。
此方の子どもが。劇磨も。あつら。に。ち。て。と。う。せ。一。人。残。る。洗。あ。ぐ。ら。と。ら。か。此。
あ。う。の。黒。う。い。何。り。も。車。牛。の。多。り。皮。と。飾。磨。の。褐。は。深。う。と。も。こ。ん。
わ。ど。黒。く。い。わ。る。ま。い。ど。ち。と。心。し。て。垢。と。う。い。か。と。呵。つ。皮。も。劇。ひ。く。斗。よ。
洗。ひ。れ。ぬ。痛。ま。ふ。堪。ど。か。ら。く。と。涙。と。こ。ろ。を。爪。突。や。り。て。背。後。と。顔。と。
こ。れ。龜。の。前。の。小。女。郎。ど。も。う。ぞ。此。様。は。う。つ。し。あ。る。目。が。わ。れ。ぬ。い。ど。う。

と。の。の。と。や。无。益。は。薪。と。費。と。か。食。物。の。う。ら。う。傍。で。虱。ひ。ら。ら。汚。穢。と。知。
あ。ぬ。う。こ。れ。伊。勢。平。氏。よ。と。ら。い。目。が。と。ら。み。れ。ば。青。菜。と。撰。ば。暇。か。し。わ。け。と。
山。蛭。小。氣。と。は。け。よ。鼻。平。太。よ。と。ら。い。鼻。あ。ひ。ひ。ぐ。ん。の。れ。ば。汁。鍋。は。む。ら。と。鱈。と。
う。拭。へ。出。尻。よ。と。ら。い。上。り。坂。は。勝。手。が。う。い。の。峯。は。の。り。わ。つ。て。薪。と。雄。鳩。胸。よ。
と。ら。い。下。坂。は。勝。手。が。う。い。の。谷。は。う。ら。つ。て。水。と。汲。猫。背。よ。鼻。垢。ま。る。め。何。よ。
ま。る。汚。穢。め。と。ら。い。か。家。鴨。よ。鍋。の。尻。の。う。ら。う。干。菜。さ。ら。め。痔。の。手。が。
あ。ら。う。洗濯。物。を。し。て。こ。い。白。眼。よ。と。ら。い。邪。睨。と。や。う。う。箒。の。番。が。相。肌。と。や。
裏。の。藪。小。氣。と。つ。け。て。核。は。箒。と。ら。い。か。小。雪。よ。手。習。精。出。せ。居。座。と。ら。
の。う。ら。う。と。わ。れ。ん。よ。有。碓。が。や。う。と。机。の。せ。て。茶。碗。の。水。を。持。と。ら。う。
弦。藻。よ。灸。の。う。ら。う。と。多。さ。ぞ。と。ら。い。病。身。の。と。や。沢。山。よ。と。多。お。れ。と。ら。う。
死。い。う。ら。う。と。と。ら。い。楨。の。か。る。が。迷。惑。と。や。野。篁。よ。と。ら。い。眉。の。ひ。さ。や。う。



光任山山安の越越
景の家宛百計の塊後中



羨麗あまを老女のせんま千金小あまのせんまき貨物のとをたのりくろひ。日夜
 劇磨のして化粧のさせさぬぐの遊藝のを教へて生立のるが時光過のやそ
 日月梭ののごくゆて。まやくも五年のと経へて今年のハ已は十三歳のあど
 到りる。然らまうくあのき宿世のや。疮瘡のの勞のかりして命の危く
 見えるるが素邪見の老女のを彼と憐心のハのりりもあられどを。
 金小ままき貨物とまゆ多の自看病してさぬぐの心をりらひけるあど。
 命をりりのとるるが花ののごく玉はひとのき顔の。忽ち妻とて醜顔の
 あり。前よりうがれを別の人と疑をうにありを老女ハ唯の死をて
 今少くを賣つるさば。うりのと後悔し。そのよな百は
 ありあらばの死るがまあるに。あらくに生て居て。娑婆あまげなる
 業人めと。中の腹立は悪口。そのも過君にもあらぬ奴ぞのく本錢

うあるるをど責つるて中をとと。うらづと苛あらうるが。紅児ハ我牙
 の因果との死らめて。朝の霜をあらして遠き峯の柴と刈ハ松吹嵐は
 身と破り夕にハ夜とこらて深き谷の水と汲ハ岩漏露は袖絞そのの
 ろど酒洗濯煮焼の業は到るまで。我身獨り又管てこをを務又ハ
 芋と績絲を繰露をうの暇あれたを老女の足腰を抚捺あらして少くも
 身と休むるまりがく。牙ハ一重の襪褌を著て寒夜と凌ぐぬれハ
 漸々小瘦細垢つりて。いくく醜姿とある。いくくも急時ハ打擲食止
 とせくまて。あくさげに呵き活つ殺しの辛目と見て。さぬぐの折檻を
 うらるほぞ。浮世を恨と牙と悔涙のかく時もあく。袖を隙もあらうらう。
 かくて一日つりのこく水と汲又出るが。おがつらあくも呼子鳥の色も淋さく
 山中と木の間笹原まけけハ足ハ棘まきりさうれ。流る血も血の涙

櫛さうへそぬ黒髪くろかみの肩かたは古ふるまて蜘蛛くまじらの糸いとはまをとれつるを。足手あしでの
 軟身なんみはあひま歩あゆむづらみ苦くるさ何なんまたらん様やうもあ。一洞いつどうむら。こ
 谷やの色いろ梢こぎみひぐ山彦やまひこの音ねのそとに深谷ふかやは心細こころこわも只ただひら。岩いわは
 腰こしをうらりけて過す来きた。こをひつ。口説くちがたごとそ哀あはれられ。吁あやを中なかは
 我身わがみやど。因果いんぐわなり。ハ又またあじ。をよとせめたり。武士ぶしの家うちは生うて父母ちちう乃なり。
 恩惠めぐみも深ふかき窓まどの裏うら汚おち乳ちち姆ははもか。づれ。透そ間まの風かぜもつらひ。に
 今いま寒か夜やの荒あ筵ひら賤せんの手業てわざは才さいとつらひ。いやれ者ものは踏あま。りり擲なり
 口惜くちがひとも无む念ねんとも。家名いへなの穢けがれ父母ちちうの耻はぢ。つらそ。あめをありて。も
 り。や兄あにへ妹いもうとの此このさのうらにあて。又また逢あい。ともあ。んり。と。お。り。を
 死しも死しが。と。一ひと。独ひとり言ごとして谷川やがわは。我わが才さいの影かげを。う。つ。一ひと。見る。に。顔かほも容ゆる
 も変かへて。我わが目めあ。り。我わが才さいとも。お。ろ。え。る。光景あかりなを。れ。た。の。か。わ。る。や。

梅津うめづの嘉門かかど景春かげはるが娘むすめと。れ。が。つ。て。ま。ふ。る。き。姿すがたや。と。い。ひ。に。撲つ的てき
 打伏うちふて。悲かなむ。ひ。も。あ。り。吹ふ峯かみは。音ねを。伐木ひきの。丁てい々々との。ま。え。る。再また又また
 とい。る。ハ。今いま日ひ。則すなはち。亡な父ちちの。命いのち日ひに。母ははの。為ため。必かならず。速すみ夜やを。れ。と。跡あとと。人ひとも。あ。る。
 づ。と。父ちち上うへハ。武ぶ士しの。道みちと。と。覺かく悟ごの。う。へ。は。い。ま。う。修しゆ羅ら乃なりら。ま。る。こ。ろ
 戦場せんばは。て。討死うちしを。あ。れ。れ。を。冥途めいどの。程ほども。お。ろ。づ。ら。し。ま。し。て。況いは母ははへ。ハ。
 人ひと手て小こや。つ。て。非業ひがふは。終つひら。ひ。ぬ。れ。を。我わが々々兄あに弟いもうと三さん人にんの。兒こ等らは。心こころが。ひ。ら。り。ま。て。
 さ。め。て。浮うき。ま。る。れ。ま。ど。痛いたり。や。中なか有あと。中なかに。迷居まよひて。さ。ぞ。我わがく。と。意い。
 懐なつし。と。お。ろ。づ。ら。し。ま。し。て。時ときは。あ。る。あ。り。亡な跡あとの。さ。ひ。吊つり。は。い。ま。や。ま。り。
 ち。ま。き。に。今いま。い。ま。づ。ら。に。香かう花はなと。手て向むかふ。こ。と。に。あ。り。が。た。勿な躰たま。さ。悲かなさ。ま。
 と。い。ひ。て。又また。あ。り。と。泣なる。が。善光寺ぜんこうじの。侍さむらいは。い。れ。り。西せいに。あ。る。と。ま。を。
 娑婆あやたと。冥途めいどの。堺川さかいがわ西せい方はう淨土じやうども。遠とほく。と。あ。り。て。西せいの。方はうに。打うちひ。り。い。

戒名ざいりた。靈魂ハ唯父母といふなり。人目とておのりわど。祭ごとくは
あつさうや。以手と合をさせあての手向と伏拜と南无阿弥陀仏を以て
父母を憐て昔患と救いせしむべしと。いと悲しげにゆふ山の鳥獸もあは
そえて色と安計呂の山鳥花とくして飛来り。紅児が膝のうへあは
られ一足の猿菓物の枝と折て持来り。紅児が袖をひたつさういふも
供物にせよとの心うと嬉しそ。若のうへ菓物とそまへ花と其下は拵て
あふも念仏とそまへるに鳥ハ傍近く下居てうへに鳴猿も掌と合せて
とこに泣れん。紅児ハ鳥獸の殊勝る心を感じていも涙もむせうと
鳥類畜類さうかくむらう。我身の上と憐て情心へあふめると。おのの老女が
あふまひハ鳥獸ハも劣るあり。鬼も蛇ももつてうへに情をやうあり
や。おがえど色とううと。うと叫びて倒れ伏すと。胸でぞ歎きか

心の中こそ哀れん。さういふ暮るといそ。深山への木立ちげまる谷陰を
えやらのうくあうぬのほど。紅児ハ起上り。ふつにせん。歎きけおがえどひま
とりて時をうしぬ。おしほいの老女と怒りて又憂目とやんせつん。とく
飯らなやとあひけ。いそぐりく小桶の水と汲取て頭よさげ。さうも嶮岨の
山坂を泣く家路は飯りたり。此時老女ハうた文車と切札のううとほし
鶴雉と料理して居さうるが。紅児ハ飯るとりたり。果して怒をさし。汝ハ
何ゆゑおしほし。と。うぐり一桶の水と汲よ。二時三時わるべき道理やあはし
言ていづら。眼のまどさう。そらと身の毛もさうむらう。唯消々とありぬ。老女ハ
益怒をほ。袖まくして立上り。丈とひしき黒髪と手よらくと巻つて
箆子の上引倒し。やれ獄道ち。一あひの息の根とらてうへんと。いひけ。彼
鳥の血のうら。出齒庵丁とさう手にさうて赫するが。やがてこれと投を。破ら

槌とあつて。背骨とつて打れむ。あか痛や堪がら。りうこんどうを中
 飯るでござりまふ。ぶんど免してござれよ。お慈悲くと泣叫と耳に
 つれど。今日一日の食むらあぞ。あひまれよと。嘔吐。足と飛せて。竈の前よ。はしと
 踢ち。こゝ外の子ども。寺よ。若家よ。わくして。彼れふ物など。食むると。傍杖
 打。合點。喜入。つふ。昔とつふ。トヤ。お返しの浮せや。と。諷く。入。多。可憐
 紅兒ハ身上痛て起上る。べきま。ふ。あ。う。ど。唯。り。て。ど。居。う。る。是。寺。と
 悲。ま。ま。の。限。り。あ。り。あ。と。あ。ひ。う。る。に。紅。兒。ハ。日。毎。く。の。折。檻。が。つ。り。う。て。病。と
 多。う。腰。ぬ。け。て。立。つ。ご。は。も。あ。う。ざ。れ。を。老。女。ハ。益。憎。を。ま。し。も。用。よ。立。ぬ。奴。
 十七貫の身の代と。无益よせし。う。ち。ま。ま。と。腹。立。て。此。家。の。う。り。う。り。に。せ。ま。ん
 別家のわりうるに。打。こ。お。た。朝。夕。の。物。ご。に。ふ。へ。ど。死。ご。い。に。し。て。お。た。け。り。う。ぞ。
 外の子さも。寺に。む。い。誰。は。も。わ。れ。彼。れ。ふ。情。を。う。け。て。物。も。ど。運。介。抱。あ。ど

そ。者。あ。う。バ。急。度。折。檻。を。う。り。う。り。に。え。と。う。く。心。得。よ。と。嚴。く。い。ひ。渡
 ける。は。ぞ。怖。わ。ひ。て。近。づ。者。も。あ。う。う。う。あ。う。に。頃。日。爰。あ。わ。う。う。ま。賣。ま。来。う。る
 幼女。年。ハ。七。つ。を。う。り。に。名。と。緑。兒。と。い。ひ。う。る。者。幼。き。心。に。も。紅。兒。と。深。く。憐。れ
 こそ。老。女。に。打。擲。せ。う。る。も。志。を。の。う。ら。も。病。苦。を。た。と。う。る。や。う。よ。
 介。抱。し。と。つ。つ。と。と。と。と。と。お。り。ひ。つ。う。に。隙。を。見。合。せ。彼。別。家。に。り。う。り。て
 闕。え。う。り。う。り。に。无。慙。や。か。紅。兒。ハ。塵。芥。ま。ら。く。て。屎。の。糞。う。が。高。く。は。り。う。
 壁。崩。床。腐。う。る。空。屋。の。裏。よ。藁。の。束。と。敷。物。と。古。蓑。と。身。に。あ。り。ひ。
 木の切を枕。と。欠。枕。を。傍。に。あ。り。て。臥。う。る。さ。ぬ。野。分。の。風。よ。古。案。山。子。と。吹
 倒。した。る。如。く。う。り。目。え。涙。よ。肉。爛。て。血。と。流。し。髪。ハ。弦。薬。と。乱。し。う。り。に
 ひ。じ。く。手。足。ハ。蟋。蟀。の。や。う。に。瘦。細。り。身。上。よ。垢。深。く。つ。り。て。膝。の。骨。高
 わ。り。れ。出。身。と。ゆ。り。を。う。り。き。の。ま。れ。を。こ。そ。生。る。人。も。あ。ら。ま。れ。唯。あ。ぬ。し。れ

骸骨のやうにぞ死くしうる。縁兒ハ此有様をいそいそ哀まひ。とらうくしうて
 額を抚つて心ちうふあふぞと問え。紅兒ハおのれ頭をあげて。いと昔いふ息とつた
 やうくもよみてたの嬉しう。兎角苦痛に堪ざらう。そも息のわらうしう。
 此苦ととのぐるべ。ともおびえざれ。一日もそ中死し。とあひぬれど。いふぞ悪業の
 滅せざるゆゑ。死ぬる時節もききし。とどろの縁兒つて。左様ハ心弱くもた
 こゝろひひか。これとてカとつひひと。袂のハ口のあひごう。握する飯と
 取つてよへるを。紅兒ハさあぐと泣。子もあはれ中にも誰一人家を
 憐れとひ来る者もあつたに。年ごとゆゑ。才と持て。深情のこぼし。礼ハ詞ハ
 つこれとて。縁兒つて。あはれ子もものうらみ。情ある者もあはれぬ。これ
 ぞ。老女まじく誠て此所小い来る。夏を許ざるゆゑ。誰もおそれてらうぐ。と
 夫ゆゑ。今老女が峯にのかりて。留まると幸ひに。あひびて。爰よ来つる

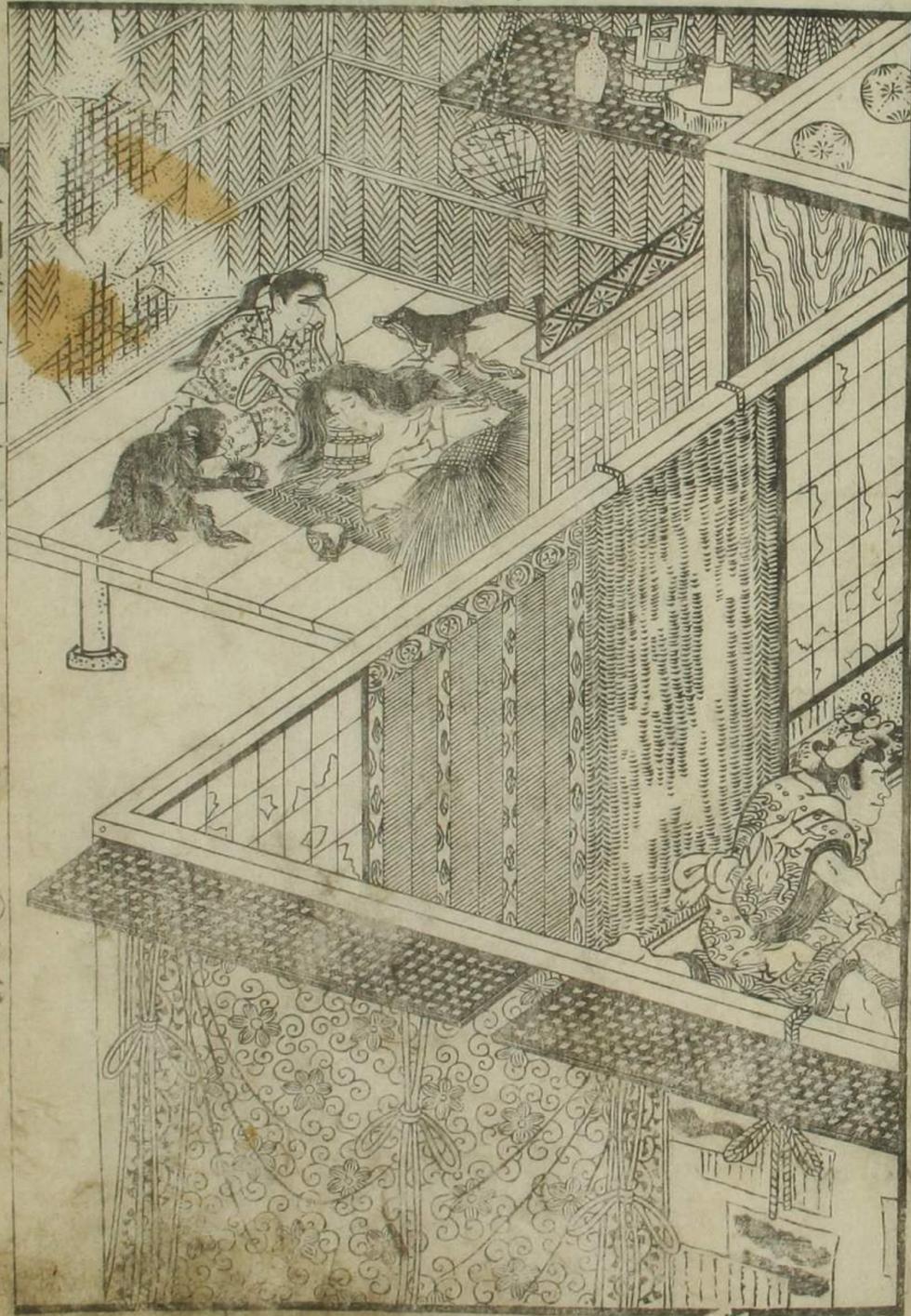
とりの紅兒ハ是とて。身上の痛さところへ。やうくに起上り。さておく
 老女ハさうり我と憎む。人買人も人あるにとりひうて。泣倒さるれば。縁兒ハ
 彼が身の汚穢げ。あはれ香のさるともいと。抱き起して。背と抚腰を
 捺かちて。勞る。心の裏こそやさし。え。折一由一足の猿枝栗と持来り。
 紅兒ガ傍にあはれ。二色三色悲げに。鳴て去に。程あ。又一羽の山鳥小魚
 とらて窓より飛入。これも紅兒ガ傍に。魚とあはれ。哇々と鳴て。飛去ぬ。縁兒ハ
 これとて。いふ。うら。紅兒語るやう。我身爰は初て来。と死し。あはれ
 善根とて。いふ。とあひつた。日に三度食物と一度減。とて。其食物と飢。猿
 又ハ鳥も。いふ。と。毎日。鳥類畜類と。いふ。其恩を忘る。ゆゑ
 ぬ。我身此別家にありて。飢ふ。と。と。折く。今の。と。食物と持来て
 する。鳥獸と。か。情。あ。の。と。苛強。面。老女。の。心。推量。して。と。

緑児（きどり）のとりひきを緑児ハ幼（こ）き心（こころ）にも道理（どうり）とかりよき一（ひと）はじうらむきて
 泣居（な）うらへ嵐（あ）にひこむ姫（ひめ）百合（は）の露（つゆ）とこがさぐさくあり。紅児（べに）とひてひき
 一河（いつ）の流（なが）は漂（た）い浅（あ）ぬ縁（えん）じ。その古郷（こきやう）へつぐそや。父母（ちち）をひりよ
 兄弟（あに）へのりるる。懇（けん）よぶぬれば縁児（えん）泣（な）くひひるる。うが古郷（こきやう）へ都（みやこ）にて
 父母（ちち）の死（し）を兄（あに）と姉（あね）ひ生（い）まれ心（こころ）細（こま）いあひ身（み）でぶさうひのとりひ
 多（おほ）れを紅児（べに）へこれと世（よ）の中（なか）ひく。似（に）と夏（なつ）もありのぞ。都（みやこ）とくさくあり
 うへ我身（わがみ）の古郷（こきやう）も都（みやこ）あり。その住家（すま）へ都（みやこ）の何方（どなた）であり。そやと問（と）
 うに都（みやこ）へ万里（まんり）小路（せうじ）でぶさうらふ。さて又父（またちち）の姓名（せいめい）ひひくとそ。それと
 うそれとひひ紅児（べに）ひひ。うらとく。父（ちち）の名（な）とわきぬ程（ほど）あり。さうして
 うある人（ひと）あり。かくわがらにさうぬるも。此方（このあた）に少（すく）うそれのありことぞ。

りやとあこの父（ちち）の名（な）へ梅津嘉門（うめづか）景春（けいしゆん）のふりつぐりやと。うら縁児（えん）ハ發（は）て
 それとあこのひひりて知（し）るるぞ。かくあり果（は）て父（ちち）の名（な）とあうて云（い）ふ耻辱（ちぶ）
 んど。ひひて問（と）ふた夏（なつ）もあり。うらもさうが父（ちち）とひひの梅津嘉門（うめづか）あてひひ
 んば。紅児（べに）の飛立（と）心（こころ）とあう。さうぶとあこの實（じつ）の名（な）へ星（ほし）とひひとさうやと
 ひられてあひと驚（おど）け。それひひのあひひと。夫（おとこ）もれば我身（わがみ）へそのの妹（あね）玉（たま）
 があれる果（は）とひひるに。縁児（えん）へあひひ不審（ふしん）顔（かほ）待（まち）人（ひと）さうが三（さん）つのと
 別（わか）れれば顔（かほ）もあひひおがえぬ。妹（あね）うらへ露（つゆ）もれば。これひひのひひとひひ
 んば。さうさうの理（ことわり）ぞ我身（わがみ）瘡（かさ）瘡（かさ）の勞（らう）かり。顔（かほ）も変（か）り其（その）うか。う衰（おとろ）て
 昔（むかし）の姿（すがた）へ塵（ちり）もさうもあひひ。うらひひも宣（のたま）ひ。これとあて疑（うたが）ひとさうして
 ひとりひひ。肌（かわ）につけさう一つの袋（ふくろ）と取（と）り。かくる夏（なつ）もあひひらちと憂（うれ）す
 にもかく。持（も）て今（いま）まで肌身（かわみ）とさうさう。此（この）一（ひと）卷（まき）ハ則（すなは）ち先祖（せんぞ）さうも傳（でん）来（らい）り

少紅病切幼緑
 女思子見
 女思子見

本朝解普提卷之三



有路郷漏五山
 安山計
 任叔山計

本朝解普提卷之三



物やて父への遺物ありとてさうりせむ。緑児の手取袋とひく裏を
えれば、うら巻物わけて上色の大幢国師の法語梅津景春所裁と
書う。そのまじく己が肌の守袋の裏より紙の色と取りて。上書に梅津
嘉門景春娘乙星騎帯と唇より手跡と合せ見るに露よぐど幼くして
父の手跡も見えあらざればと。自業あるり疑ふとて。まじりて。証拠は
黒痣。さうりて見えおぼえあつたて。袖まじりて腕を見れば。七つの黒痣
七揺破軍の形あれ。紅児のれを見。疑もあら我妹。うら妹上りておぼ
あつらうごぼしどや。このくわじと寄添て兄弟手の手と取組。形はまじら
筒井筒井づにひく垂髪子の。まじりに見ると顔と顔姉ハ変て醜あつ
妹ハ益養麗瓦玉とらうざれど。うらわの山の井の深き歎は汲流
涙ハかた涙あり。紅児ハ良久のりともいざりしが。緑児がこれの髪と搔あげ

つ。顔つくとと打まり。さうの者や糸惜や。そのこの三つの特別とこれば。
顔も容も見忘れんと今心とつてうらと見れば。目の裏のまじりさハ父上
其まじりて襟つきの様子ハ母人にく似たり。そのこと見るハ亡父母を。うらび見
まのうら心地せうらうら。此まのうらに生まうて。あやわらさやわわつら
かりひしに不思議にも又ぬら逢ぬ嬉し。一六夢現とも見えがう。何人ハ
情にて。これの所ハ生立ちるとと問を。緑児ハうら。うらハ何直もこれま
林ど。後々まじり如意山とやうら山の谷底は捨らとて。その幸ハ雪深さ
所ハ落て身に恙ありしと。近江の志賀の山里に任陸作といふ人。都
炭と売に通ふとて。其所と通る。且とひひて育る。陸作といふ人。人
がと夫婦とも不情。ゆら。うらに不便とらうとて。これをいふ生立ぬ物心
知やうにありて。陸作といふ語まじり。そのこの実の親とら。梅津嘉門

景春の如く。歴々の武士あり。そのこと拾ひて。肌は守袋を帯て。臍帯の昏つて。てふ夫と知るあり。又都人の語を。一に景春の打虎せられ。砌を。この母此花の。も人手に。兄と姉ハ。一知。兄ハ。彦九姉ハ。玉蟲と其名。まを。す。何と。兄姉乃。一。年来心にか。れ。今に。於て。知。せん。後。まで土民の子と。い。不。便。と。語。も。氏も。素。姓も。ある。成長の。後。兄。姉。乃。逢。こと。わ。これ。証。兄弟の名。告。せ。此。守。袋。と。臍。帯。の。包。と。に。後。され。ぬ。兄。人。や。姉。人の。わり。と。ま。り。る。と。く。と。不。道。して。心。を。逢。く。泣。ぬ。日。を。あ。り。し。ど。や。と。い。ひ。紅。児。い。れ。と。や。ら。し。く。い。我。身。とも。あ。り。と。又。夫。程。情。あ。る。人。に。養。も。て。生。立。た。る。後。も。賣。も。て

来。い。何。の。あ。せ。され。其。度。陸。作。の。い。去。年。の。秋。病。小。う。り。て。む。じ。く。養。母。の。袖。款。の。と。ま。り。と。二。人。暮。し。て。居。り。陸。作。の。菩。提。の。為。信。濃。乃。困。善。光。寺。へ。参。り。と。養。母。と。ま。り。と。二。人。連。り。て。旅。立。り。養。母。ハ。義。濃。と。信。濃。の。塚。熊。个。洞。と。り。呀。め。て。急。病。起。り。これ。日。を。あ。り。と。露。現。も。あ。り。わ。れ。迷。て。お。ろ。道。に。と。り。た。人。餘。死。を。も。一。且。善。光。寺。に。参。り。て。養。母。の。志。と。遂。我。身。の。罪。障。と。滅。る。便。も。其。上。は。て。り。に。由。成。果。あ。り。と。り。性。左。来。左。の。旅。人。の。袖。に。掌。を。合。腰。を。屈。一。銭。二。銭。の。情。を。う。け。て。露。命。を。つ。あ。心。細。さ。お。が。つ。の。獨。旅。野。山。に。卧。お。と。ら。し。た。獸。の。愁。わ。り。夜。嵐。を。あ。め。と。人。の。軒。下。橋。の上。に。居。る。盗。人。よ。畜。生。よ。と。罵。り。て。打。擲。も。身。に。生。疵。ハ。絶。え。ど。悲。さ。夏。の。数。々。い。ひ。つ。れ。ぬ。旅。ぞ。り。つ。て。や。く。此。山。の。麓。堀。川。と。り。呀。め

たどり来て野宿して居りしが此家の有漏路太郎兄弟に捕りては
 所小来り多し我身の不幸不仕合とあひ申しては姉とては紅児が膝に
 顔を押めて泣き紅児は涙を流し涙せぬあはむ言はずば有漏路兄弟へ
 我々が沖ま仇なり父うへ誰あらふ足利公の管領職由理大夫勝基君の
 軍師にて高位高官にも敬せらるる者なれば身もしが益の有様と見限ぬ
 恩美の為は岩倉山にて打死なりとらふ敵兵宿所とては遠く母うへ
 とて懐は抱我身の手と携て雪中とたどり如意山まで落たし
 痛しや彼有漏路兄弟が為はあが殺しにありぬとあはれ谷底は陽
 落され我身の彼兄弟に奪取さう其時兄彦九郎の十一才はそわじが父の
 勇氣をうけつぎあひて志烈く武藝といひ力量といひ人又勝たすいぬと
 獨跡にとまらて敵と戦ひ其後いつにありぬとあはれ

我身ハ有漏路兄弟が手より此所に売来て五歳と過し今ハ己ハ
 十三歳ふあはれ又そこの名とし星とつけらるる其腕の黒痣七揺破軍
 星の形に似たるゆゑなり是迄の我苦患のつらさへてらん方もは遠寺の
 鐘の声暮六と告ると聞ても亡父戀し母戀しとあはれ心乃かるせわしく
 空飛雁をあめて都へゆくうさなれ兄上や妹の行方いつにありぬや
 戀しやとあはれ日こそあはれいあはれいぞや運命さうな夏身の上あはれ存て
 生耻をうさるる死して此世の火宅をのれ草葉の陰に父母も孝行
 尽さるるあはれあはれとあはれ或は鎌と把わけて咽よわて時もあり又
 小石と袂に入れて水に臨し時もあり死んとあはれ我身失て母の
 敵有漏路太郎兄弟との度と誰知者もあはれいふも此山と
 逃出都にのび兄うへのゆへとてつねて委度と語ら二つあはれ生死

いりど。我身とりのにちるひても。其子のゆるしあられり。慈悲ぞ情ぞ
これしとひて。掌と合せて狩る。老女のこれと死なせど。緑児に對ひ
汝さるり。彼が傍に居る。りりまでも爰に居て。彼れがのれ死ると
見よとひて。荒繩と把て高手小手にけり。わげ。柱に高く縛つけて。
紅児とゆつつけ。汝はいまぞ死なせど。く業のわし死奴。これ面見せ
よと。腮は片足つけて。顔とりけ。瘦とる。か。い。これぞ死に回わる
まの。緑児よ。今夜の其夜とあり。此業人めがうり。色と穿て。この
いのざぬと。鼻の先にて盧胡ぞ此兎と料理して。寐酒飲んと。謔
母屋の方へ出ゆね。紅児ハ絶入て志をく音もあうり。やて時刻
もうつりゆね。小夜もやや更ぬれを。月の影さりのうく。峯の嵐も
音絶て。唯谷水のむせぶの。りびりげに鳴鳥の声も。寂寞崩家乃。

飯篠群竹。趣垣づらくに。鳴虫の音も。うりて。細き糸薄の。い。あ。い。れ。死
まらうり。緑児ハまびくく。うられて。髪ハ乱。目ハ泣。し。才ハあ。び。れ
腕ハ高く腫上り。死おれ。秋の蚊の。飢る。俵に集来。こ。ま。り。に
身上と。蟻る。ほ。ぞ。堪。ご。さい。才と。動。せ。び。の。づ。縛。繩。咽。を。あ。ち。り。き
つうて。昔。し。ん。ん。ハ。蚊。と。追。こ。も。あ。り。が。う。唯。う。め。て。ぞ。居。り。う。り。時。は
紅児ハ。や。く。正。氣。つ。て。起。上。り。緑。児。ハ。繩。と。解。中。あ。と。あ。ひ。て。這。寄
ども。柱。ハ。高。く。う。ら。れ。れ。バ。壁。の。才。の。せん。さ。る。壁。に。さ。う。つ。れ。立。上。り
て。合。破。と。伏。の。び。上。り。て。撞。的。倒。て。氣。と。あ。せ。り。る。に。ぞ。身。持。を。う。り
目。轉。て。病。苦。と。ま。し。わ。か。昔。も。堪。ご。や。と。叫。呼。七。轉。八。倒。し。て。今。も。死。ぬ
べき。苦。痛。の。体。緑。児。ハ。是。と。見。る。に。志。の。び。ど。介。抱。し。く。あ。ん。ど。も。身。動
あ。ぬ。縛。繩。の。う。り。に。姉。う。よ。昔。し。う。ご。さ。り。せ。ら。あ。い。か。あ。く。ど。死。で

大月卒 寄是 卷之三

くらさるか。此繩を解てり。い。解てり。いと身と悶我身の痛さ。いとど
 ちて。ひげをちやれ。ど。か。ね。繩目。玉の腕を荒繩。の。刺破。する。疵。口。より。流る。
 血。赤。血の。涙。身。うち。と。朱。に。深。あ。る。り。折。し。も。先。程。の。猿。再。又。馳。来。り。
 緑。が。繩。を。解。て。去。け。る。に。ぞ。緑。兒。ハ。嬉。し。さ。限。あ。く。外。の。方。に。走。出。清。水。と。合。来。て
 い。そ。が。い。く。紅。兒。と。抱。上。口。に。う。ろ。し。て。勞。れ。ば。や。う。く。入。心。地。つ。て。苦。息。の
 下。り。い。ひ。る。り。家。身。の。神。を。決。山。と。逃。出。ん。と。あ。ひ。し。由。多。草。刈。童。さ。も。れ
 づ。孫。同。て。一。條。の。逆。道。あ。る。事。と。知。れ。ぬ。さ。も。め。く。壁。と。あり。し。も。多。逃。走。さ
 ず。り。も。多。く。打。過。ぬ。と。あ。い。此。曉。と。待。て。此。山。と。逃。下。り。當。国。の。主。護。職。望。月
 左。衛。門。殿。の。館。と。づ。秘。行。此。法。語。一。卷。と。證。拠。と。し。て。梅。津。が。娘。と。か。の。り。
 老。女。あ。ら。び。に。有。漏。路。兄。弟。が。悪。事。と。告。ぎ。こ。ん。や。べ。し。と。さ。ら。ば。兄。う。の
 ゆ。く。い。と。づ。ぬ。る。便。と。も。あ。り。母。う。の。仇。と。も。報。我。身。も。又。む。い。ひ。と。れ。て

療。治。と。く。く。あ。る。本。復。さ。る。り。も。あ。り。ぬ。べ。し。り。も。夜。明。に。間。も。ゆ。じ。彼。逆。道。ハ
 个。様。々。と。い。ひ。と。い。へ。ん。ば。緑。兒。ハ。頭。を。打。ち。り。て。と。く。人。そ。れ。が。う。れ。に。も。せ。ぬ。
 姉。う。の。此。体。と。見。捨。て。何。と。ゆ。る。べき。何。と。ぞ。快。気。あ。ひ。て。兄。弟。つ。き。立。
 逃。て。と。と。い。ひ。い。ん。べ。と。あ。い。宣。あ。れ。ど。そ。あ。さ。が。爰。に。居。り。と。そ。家。病。の
 あ。り。る。べき。道。理。も。か。し。時。刻。う。ろ。つ。て。老。女。睡。を。醒。し。あ。べ。そ。あ。さ。も。我。身。の
 此。う。れ。の。憂。目。あ。ら。ん。も。知。れ。免。角。り。の。間。に。の。れ。と。夜。明。鳥。が。鳴。を
 う。し。そ。あ。さ。に。再。逢。ま。せ。ぬ。死。ぬ。ま。よ。や。あ。い。の。氣。づ。い。む。と。死。と。急。度
 待。て。居。る。疾。々。ゆ。け。と。さ。う。さ。れ。て。か。し。こ。い。や。う。で。も。さ。さ。が。年。乃。と。ぬ。ゆ。え。
 此。詞。と。実。と。し。と。く。う。ぶ。ま。う。い。逃。下。て。頓。て。む。久。に。い。と。し。ま。ち。よ。か。あ。り。と。ど
 死。む。に。あ。り。せ。り。と。い。ひ。の。志。を。し。の。う。ち。も。各。残。と。や。と。取。つ。ま。う。て。今。生。の
 別。と。い。虫。が。知。る。と。あ。や。う。う。泣。姉。が。心。の。悲。さ。の。五。臟。六。腑。も。ら。ぎ。る。と。あ。い。

ひしくと抱合別きてぞ君よりなる。時に四五羽の鳥飛来て軒に近く舞
居より紅兒是と化と見てこれ妹の鳥の為体道とをへんとその意
あふめ。夜も已に明さればをくくと急せつ。彼巻物と取て守袋の脐帯の
色ととも懐に入させ齋と高くかけてあり。つゞくと心強ゆ押入れ
各残を上げに立出が果して彼鳥もハ前に飛道とゆいにさかひは。
緑児の出入出るが二足行てより三足ゆてより心ハあつと小後髪
引くやうにちがえしが。ちひまりく鳥の飛方と心わてに走去。紅児ハ石迄
這出て後と見送り。これが此壺のいとぬい今一度ありつて顔見せそ
くれより。死ぬといひと實とちひ。それとかにゆける。さどがけ年のぬ
ゆゑ。なんせいのが不便あり。あんのこれが生らさふ死別と知してゆける
夏のかいやくと影はゆるまで伸上り。わか心みの朝霧や跡を履てりふ

見えぬと前と慕て魂のりぬけの體秋の蟬うんと一色叫マ。尻居に撞的倒しが
ざらうらる今般の際南无阿弥陀佛かむわと佛とさつる色も明残る。
蚊の鳴声に異あつど。諸行无常と吹風寂滅為樂と一葉散ゆ一葉散
息づくひ。ひとくにかうみ玉の緒のまされてもあつらうに。時に怪しや。一陣の冷
風颯と吹来り。樹木岩石鳴動して一道の陰火閃々と燃上り。空中の大勢
少く呵々と笑声聞えらるが。形は見えど忽音もあつらう。これは是先年
鳥部野に會合して。嘉門が妻子と亡とと相儀したる。悪靈寺の
所為あふ。此時主の老女ハ別家の方に物音のるとまつけて睡と醒。目こ
そつ。抚て出来て足らうるに。いまあつの繩解捨わつて。緑児ハ以居と紅児ハ
息絶て死し居らうるに。緑児ハいづくへ去つるや。こつとぶらうつ。地上を見れば。
朝霜の裏いらのうに足あとのつたてあつらるに。儲ハ紅児ハ緑児ハ繩と解

生なまとられたば千金せんぎんにもうちのちんは

 者ものとらればもののきのそれを

 奴やつとられば枉まがて百兩りやう

 売うべくるらうの眼まなこのちのち

 人ひとと嘲て又申まをんと

 そのと引きまりの氣き短たん

 老ろう女にょか左のちを百兩りやう

 買かべとて懐中なつかの金

 取とりて流ながれば老ろう女にょ

 是これとうけとり數とのうちとあて



安計呂山乃
 百魔山姥
 捕手乃人数と

莞わん尔に笑わらむ身の果報はつふ人か。

 一ひとの所へ来て搖錢せん樹じゆの傍を

 得えとりといひて。緑りよく児こといはれば。

 旅りよく人ひとの緑児こが身上みじやうの塵を

 打うち拂はらいはく是といふとの貨物

 あれば随分ずいぶん情なさけといふは。からうと

 氣きづくらうあれといふ人の緑児こ

 只ただ虎この丸といはれて龍の淵に

 入いらるといはれて泣といふ外の

 ことといはれかつて旅人りよくの緑児

 と背に負て山と下り老女らうにょ



望月左衛門頭廉の
 家士寺山姥を
 捕んとぞ

家路に飯有り。儲有漏路兄弟の
 老女が下知とつけ。紅児が死骸と
 藁薦小つてそゆるい出埋べし所と
 見立たるが。此家の背後に年経るる
 榎あり。是は往古真の山姥が生木の
 杖とほまははしるに根と生して。
 今の大樹とあり。これと山姥の杖榎
 とらり。兄弟の者へ此榎のりて埋べし
 るい土中で穿るるに何ゆわん鉄のさんに
 ある物あるはぞ。いさくして堀出しえんに
 一つの壺にて。裏にありこの金あり。兄弟顔を見合せて莞尔と笑ひこれの



疑もるに老女が貯の金あり。さうさうど此所と堀めて一々天のふらり。老女折く
 此木のりて徘徊せしゆ急。おはて不審にひひに果せるふとらうこびつ。
 兄弟金をもち取て懐に。紅児が死骸其穴にうちこ。東の路とのぞくと
 逃去り。見る折し老女は彼百両の金と懐中し立飯り。榎のりて目と
 つけて逃びえんを壺と堀り。金に残らざらうれば。さては兄弟の者らに
 死骸を埋めて。此壺を堀り。金と奪て逃るるん悪奴原がゆるまの哉と
 大に怒さるめて東の道とゆれつん追りて捕べしと。いそぐく嗜の一腰と
 取ら。飛が如くいとせむね。つて北町をうらひゆたし。所は茂林のうらうら
 腹巻に擘手。脇楯。巻手。緋あご。に打扮。捕手の人数とおわし。者
 大勢あつた。後前に立あさりて老女と中に取らる。老女の前後を顧
 て。い何ぞとよび。捕手の者。声いげ。いひる。何ぞと悪多。

是乃所携杖也。京傳案に山姥の能に杖生木の枝をうらむかの榎乃古事に扱ゆ。

○秋一段をもて是謠曲山姥に扱てはくま。山姥の謠一休はくま。



俠客提婆達多品第六

夫の儲おんるに又梅津嘉門子彦丸の前の年一休の弟子となりて剃髮法名と是雲といひて一休の庵室に在。はじめの程の坐禪念經の外他を顧じ。よく勢るが為人よとさぐひ志わしくありて出家乃行をきくひ山野に獵して鳥獸をとり。腕ごとと好て人よ痲と負かどて放逸無慙の行跡とほしるゆ。一休りてあつひあひて止こと成得ど勘當一庵室と追出あひぬれば是雲ハオとうとまき所ざんるるが浪花の千日寺のやうに葬具と賣てと經營棺内とよ者あて一休の檀越おてありゆ。是雲これと力に浪花よ到棺内よまてえ。



俠者野曝
悟助
華具を
造て
なりひ
こと

委細と語て打たげきまらば棺内不便にあり。我が家も同居してのりもがの
 うとそりいへと養おれらるが是雲の還俗と名と悟助と更葬具を造るを覺て
 大小棺内がうらひのたをけとありらる。益不便とくく我子の如くにありて養ひ
 おれらる内棺内へ病にうて七人の數に入ぬ素妻子たる者にて跡をばぐおれ
 親類さへあうられ。是非なく悟助此家の主とあり。自己葬具と造れと賣て
 月日とおらぬ。時光流水の如く。金鳥玉兔の足疾走一瞬の間は幾年と
 経て。悟助已ふ廿餘歳にありらるが。熟るひらる。我身不肖ふして出家とせむと
 之を尋常の人にてわんも口惜とくおれ。くく形へ俗体ありとも。毎月上十五日
 出家のかこひとくを。又出家の人と救も俗の人と救も其救とくりに於て
 差別ありとく。下十五日の使者とあり。人に災を。惡漢とく。何とく
 諸人と救へるとあり。毎月上十五日の俗体に袈裟をかけ。精進潔斎して朝夕

香で焼經と読万とく。ていうわごもひびく。た更わつても怒とく。争とくを
 せと柔和忍辱と專とく。下十五日の使者の打扮して所々方々の人立おれ。野と
 徘徊し剛とく。柔とた。人の難養とて。救とく。ゆかろう。ゆかに
 人皆大に喜びぬ人の災と省とく。融融目中の草と抜とく。とく。意とく。
 野曝の白骨と地紋小つける衣服を著る。ゆかに野曝悟助と異名とく。尊敬
 せざるありらる。愛に又の。説麻彦惣の前の羊泉州塚に居をう。甲斐町
 中濱とく。野に扇店とひく。名と塵右衛門と更自己扇の繪をう。妻香晒の
 扇を折る。て夫婦とく。せだに。漸々仕合とく。何不足
 ちん身代とあり。塵右衛門に己は三十分の到香晒の三十六才又娘小田井も健
 生立て今年十五才に到る。養目貌養所梨花小雨を。白玉よ香とく。か
 ひとく。容あれば一度これを見る者心と動とく。て一日香晒小田井と

伴て浪花に赴き女太夫六字南无右衛門が淨瑠璃芝居と見物しるるごとく
芝居を傍の茶店又休居する折しも前面の方より

急い入江のすく。難波入江小名も高き腕はあがえの婆羅門ぐみと。
くんとつらみく黒腸組より無理が通らぬのうけの茶筌立髪と草履
大道せまね張臂や髪と自慢のきりぎりす長刀六婆羅様の出立をく。

とつらみ連て来りし舍利弗鬼平次幻蝶藏といふ男達の悪者多う大に酔狂して
嘯て来りまが笛とちよふ時し小田井が美麗姿と見えて以茶店に立寄る
戯るるをいひのち。彼所の酒屋に連れて酒の相入ささぐ。つぎ来れと云ふ。

兩人小田井が手とりて引立出るほど香晒のあて迷て引さる。詞をばくして
化んぬも兩人の女をうと侮て合點せど大に難義にあひびく。時は野曝悟助
折る此所に来り。香晒親子が難義の体と見るにちよび舍利弗幻の兩人は

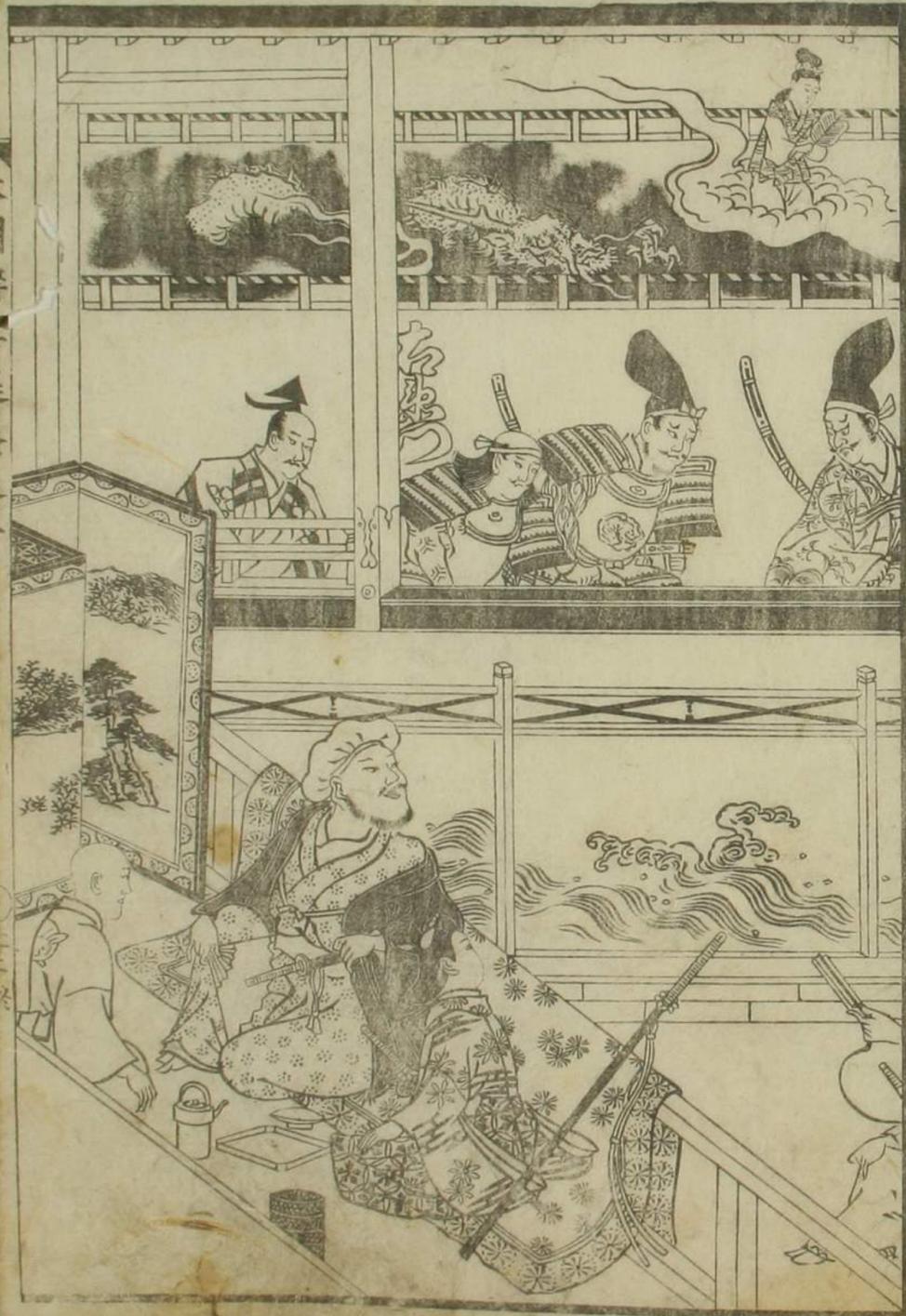
ひひ見ればかむくりの連と見えり。无益ある戯して迷惑さるか。放て飯らちよと
ひひ押さる香晒寺にひひ此うまうと疾々やたしく人へ香晒の腰とわめ

しつて呵へかして我々難義と救あつる。けかさよと一礼をのぐ鯨の口を
のんれららら娘の手と携て急去ぬ舍利弗幻の兩人は野曝か人に
尊敬せらる憎居る折しるれ。幸とつらみせてりらに野曝汝へ出過さる

奴めか誰もこのまざるに女原の具負して逃しや。我くが奥を妨る奇怪
さよ此うの汝と相手に腹をさぐ。詈て右よめると野曝はちやこしや
ありとららうの身と閃て撞的踏飛し。後に組と雌手とのびて腰車弓手と

くせて幻が首筋つんで人車起あつて又ひひ来る舍利弗が前がはくんと
首筋つせどひるまぬ我武者。幻も又起上り。飛つて両方より腕がくみ
取つて腕をいひなぬと身とまづら。くまを腕車。或は臂わて小手返し

大女夫六南右門淨琉璃居
之芝瑠衛無字



日本繪芝川師宣畫

右首柳塘館所藏

炭川

六字南无 禪門の實傳の事
彫畫集に詳なり 修行の時と
俟得て見んべし

後矢筈にありあがりて心得脱首刎返す。エイと一声まろさうさぬの舍利弗が
取つてその首をうへて頭轉倒起る所と踢返して泥下駄めて兩人と踏つひく
踏飛し手をもひきて立さうんげに冷眼拵扎る。兩人の者ハやうく起上るが
そても敵をうめわいどをさひん。面とあつら頭とあえて逃さるぬ此兩入日未
此辺に來りて屢狂破るゆゑ是と見物して居る者ども心中に快とありぬ。
野曝が本事と讚ぐるありりる。諸野曝へ尺八の歌口とありして瀧落まへが
と吹鳴し。あづく我家に飯る。此誼嘩の仕返し。うらわらる中ん次の巻と
讀て志願を

本朝醉菩提卷之三終



